ISSN 1346-7220

鹿児島大学総合研究博物館

THE KAGOSHIMA UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter

NO.26 October 2010

2010年度の活動

第10回公開講座「謎の石塔『薩摩塔』を科学する」

2010年7月31日(土)13:30 -16:00

場所／鹿児島大学郡元キャンパス総合教育研究棟2階203室
講師／高津孝(鹿児島大学法文学部)「中国から運ばれた石塔–東アジアの海域交流」
橋口亘(坊津歴史資料センター輝津館)「薩摩塔の考古学的考察」
大木公彦(鹿児島大学総合研究博物館)「薩摩塔と中国梅園石を分析して」
入場無料

これからのイベント

第15回研究交流会「中世の鹿児島と豊後府内」

2010年10月9日(土)13:30-16:30

場所／鹿児島大学郡元キャンパス総合教育研究棟2階教室
講師／坪根伸也(大分市教育委員会)「南蛮貿易都市豊後府内—発掘調査により姿を現した豊後府内の実像と島津氏による爪痕—」
日隈正守(鹿児島大学教育学部)「中世における薩摩国鹿児島郡について」
橋本達也(鹿児島大学総合研究博物館)「中世鹿児島の考古学の現状と課題」
参加無料

第18回市民講座「大陸移動によって進化した動物たち」

2010年11月13日(土)13:30-14:30

場所／鹿児島大学郡元キャンパス
講師／熊澤慶伯(名古屋市立大学システム自然科学研究科教授)
入場無料

第10回自然体験ツアー「みる・とる・つくる—自然のジュエリー」

2010年11月27日(土)9:30-16:00

場所／薩摩川内市入来町清浦ダム
講師／寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)
定員30名(事前の申し込み必要)、くわしくは下記問い合わせ先まで

第10回特別展「植物のビーズ『ジュズダマ』と暮らす」

2010年12月4日(土)-2011年1月16日(日)9:00-17:00

休館日／月曜日と年末年始12/31–1/2
場所／鹿児島県立博物館1階企画展示室(鹿児島市城山町1-1)
共同開催／鹿児島県立博物館
入場無料

第19回市民講座「植物とくすり」

2010年12月11日(土)13:30-15:00

場所／鹿児島県立博物館3階研修室
講師／本多義昭(姫路獨協大学薬学部長)
参加無料

■ 編集・発行　鹿児島大学総合研究博物館
〒890-0065鹿児島市郡元1-21-30
TEL:099-285-8141 FAX:099-285-7267
(常設展示室TEL:099-285-7259)
http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/
■発行日　2010年10月1日

鹿児島大学総合研究博物館第10回特別展・鹿児島県立博物館企画展

The 10th Special Exhibition of Kagoshima University Museum
Living with Plants: Job's Tears Seed Beads Collection of the World

植物のビーズ
「ジュズダマ」と暮らす

私たちの暮らしのすぐ近くに
ジュズダマはありました。

植物のビーズ『ジュズダマと暮らす』によせて

毎日の暮らしの中で、わたしたちはたくさんの植物とかかわりあって生きています。植物は、食べものや着るもの、家や道具をつくる素材になります。健康のために役立てたり、ながめて楽しんだりすることもあります。そのような人とのかかわりの深い植物のなかから、この展覧会では、ジュズダマのなかまをとりあげます。

ジュズダマのなかまの植物は、東南アジアを中心に、世界の熱帯や温帯に広く分布しています。鹿児島県内でも、夏の終わりから秋にかけて、川べりや空き地で、かたくてつるつるした種をつけます。世界各地の人びとは、この種をビーズのような素材としてつかい、さまざまなものをつくってきました。また、薬や食べ物にしている人もいます。

この展覧会では、東南アジアを中心に、世界の各地で、ジュズダマの種をビーズのようにつかって、つくったものを展示します。どこで、だれが、どんなものをつくっているのか、ひとつひとつをじっくりごらんになってください。

また、今どこにジュズダマが生えているのか、地元の人びとはどんなつかい方をしているのか、みなさんから情報を集めて、「ジュズダママップ」をつくります。みなさんも調査に参加し、観察や記録をしてみてください。

この展覧会が、身近な自然環境に生える植物、そして、植物と暮らしとのかかわりについて、みつめるきっかけになればさいわいです。

ジュズダマの植物学

〈分類〉

ジュズダマは、イネ科ジュズダマ属の植物です。イネ科には、イネ、パンコムギ、トウモロコシなどの穀類、砂糖をとるためのサトウキビ、香りを楽しむレモングラスなど、食べ物になる植物がたくさんふくまれています。また、タケやササは家や道具をつくる素材に、シバは芝生としてガーデニングにつかわれます。

〈形態〉

ジュズダマの背の高さはおよそ1mから2m、茎には節があって、枝分かれします。葉のかたちは細長く、先がとがっていて、トウモロコシとよく似ています。夏のおわりから秋にかけて、茎の先の方に花が咲きます。ジュズダマの花には、雌花の部分と雄花の部分とがあります。

雌花は、先のとがった、つぼのようなものにつつまれています。これを植物学用語では総苞（そうほう）といいますが、ここでは種（たね）とよぶことにしましょう。種の中からは、白い毛糸のようなめしべがのびてきます。種は、若い時はやわらかくて緑色をしていますが、熟すにつれて、しだいにかたくなり、色は灰色にかわっていきます。また表面がつやつやとしてきます。ジュズダマのいちばんの特徴は、この種にあるのです。

いっぽう、雄花は、種のなかから伸びた軸の先に、うろこを重ねたようなかたちでついています。そこから黄色いおしべがたれてでてきます。

〈繁殖〉

ジュズダマは、ふたつの方法でふえます。

ひとつめは、茎と根でふえる方法です。冬になると、茎のほとんどは枯れてしまいますが、地面近くの茎と根は生き残ります。そして、次の年の夏に、ふたたび茎をのばし、葉をしげらせます。

ふたつめは、種でふえる方法です。熟した種は親植物からこぼれ落ち、根や芽をだして新しい植物になります。

〈生育地〉

ジュズダマは、農村や街中の川や、水路などの水辺に生える植物です。道端や空き地、線路のわきなどに生えることもあります。ただし、人家をはなれた草原や山の中ではみつけることはできません。つまり、ジュズダマは、人がふだん生活するところに生える、人里の植物のひとつなのです。

〈種類〉

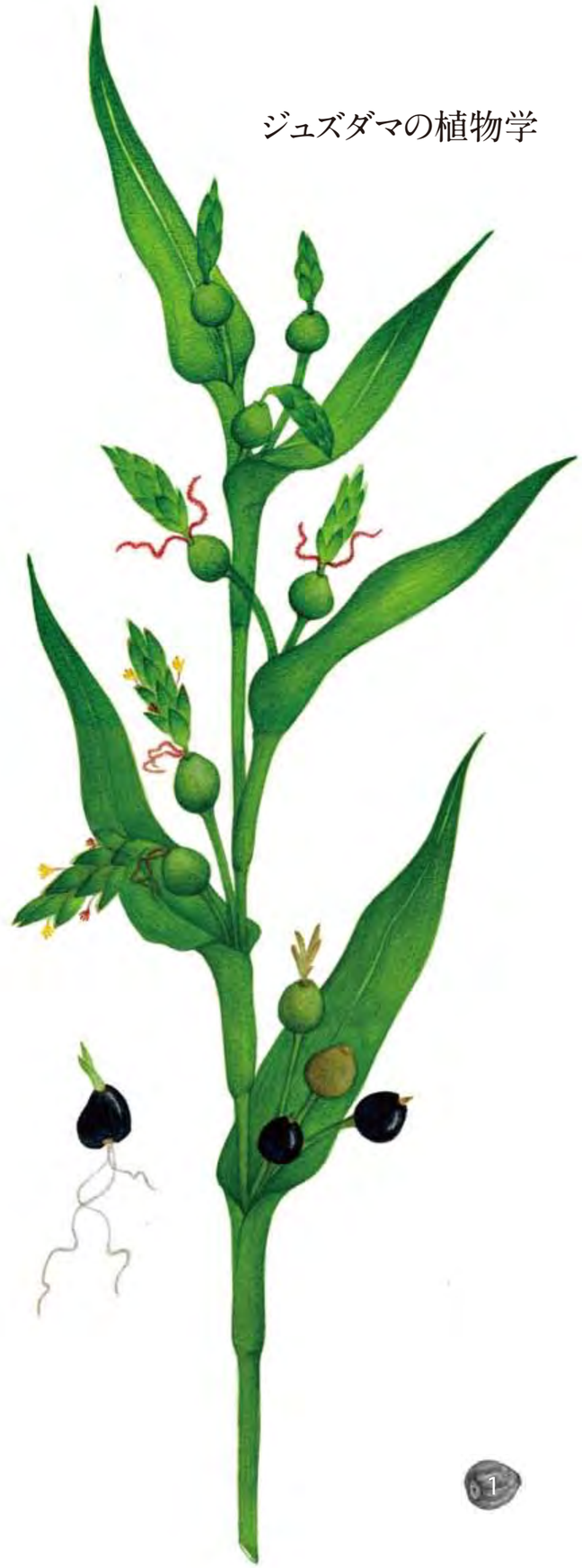
ジュズダマのなかまは、世界に全部で７種類みつかっています。

ジュズダマのなかまのうち、６種類は野生植物です。このうちの5種類が、東南アジアに生えています。つまり東南アジアは、ジュズダマのなかまの種類がもっとも多い場所なのです。

いっぽう日本には、１種類だけが生えています。この１種類のことを日本の人たちは、ジュズダマとよんでいます。ジュズダマは、東南アジアから、日本だけでなく、アフリカ、アジア、オセアニア、アメリカの熱帯から温帯にかけて広がっています。

ジュズダマと東南アジアでみつかる他のジュズダマのなかまをくらべると、種の形や色がちがっています。ジュズダマの種は、先のとがった涙型で、灰色のものがほとんどです。ところが、東南アジアのジュズダマのなかまには、細長い形、まるくて大きな形、まるくて小さな形の種をつけるものがあります。また、色には白、うすい茶、こげ茶、黒などいろいろなものがあります。

ジュズダマのなかまのうち、１種類は栽培植物です。これが穀類のハトムギです。ハトムギはおもに東南アジアと東アジアで栽培されています。ジュズダマのなかまの植物の種は熟すとたいへんかたくなりますが、ハトムギの種は、熟した後も、指でおせばかんたんに割れます。人は、種の中身のでんぷんを食べるために、ハトムギを育てます。ですから、でんぷんがとりだしやすいように、種が割れやすい性質をもっているのです。



ジュズダマは、いつも人の近くに生えていた。
人は、ジュズダマがつかえると気づいた。

人とのかかわり

ものをつくる

ジュズダマのなかまの種をつかうと、ものをつくることができます。その理由は、種がかたくて、真ん中にたてに穴があいているから。つまり、ジュズダマの種は、何もしなくても、そのままビーズとしてつかうことができる便利な素材なのです。真ん中の穴は、もともとは雄花の軸がとおっていた穴です。また、種の表面は陶器のようにつやがあって、見た目にきれいです。

ジュズダマのなかまのうち、次のページの4種類が、植物のビーズとして、よくつかわれます。

薬にする

ジュズダマのなかまの根、茎、葉、種などをつかうと、薬をつくることができます。

東南アジアの人たちは、ジュズダマのなかまで、病気になった人を手当してきました。また、穀類のハトムギは、中国や台湾、日本で、漢方薬としてつかわれています。

食べる・飲む

ハトムギの種の中身のでんぷんをつかうと、食べものや飲みものをつくることができます。

種からとりだした粒をそのまま煮たり、蒸したりして主食にしたり、粉にひいてパンやおやつをつくったりします。また、お茶やお酒にして、飲むこともあります。

ジュズダマ
涙型
Coix lacryma-jobi var. *lacryma-jobi*
世界の熱帯から温帯で、広くつかわれています。
日本にも生えています。

ステノカルパ変種
細長い
Coix lacryma-jobi var. *stenocarpa*
おもに東南アジアの人がつかっています。

種の形は4種類

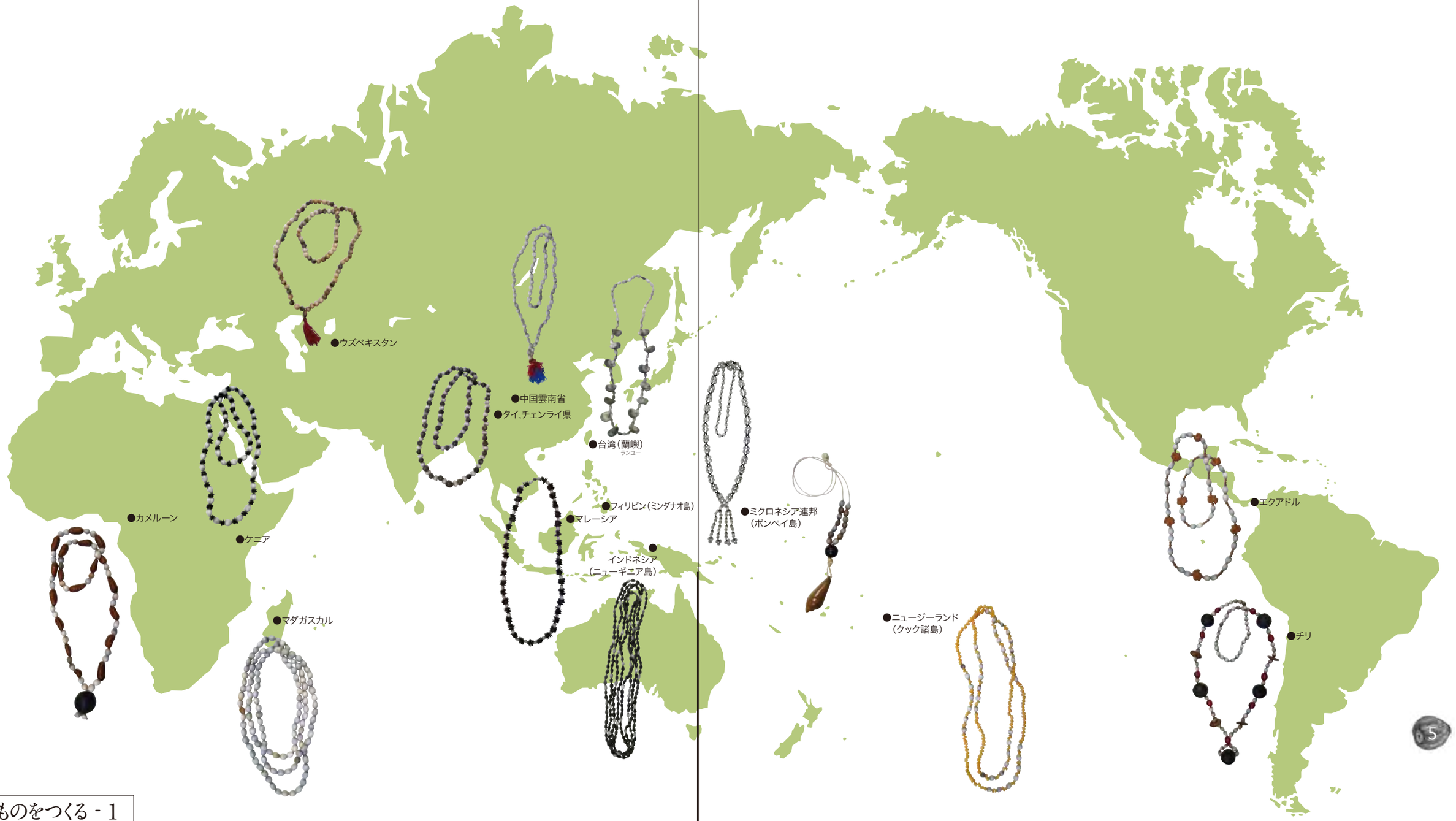
モニリファ変種
大きくて丸い
Coix lacryma-jobi var. *monilifer*
おもに東南アジアの人がつかっています。

プエラルム変種
小さくて丸い
Coix puellarum
おもに東南アジアの人がつかっています。

ハトムギとジュズダマは親戚

ハトムギ
Coix lacryma-jobi subsp. *ma-yuen*

ハトムギの実はジュズダマと同じ涙型ですが、
たてに線がはいっています。
指で押すとかんたんに割れます。



ものをつくる - 1

糸でつなぐ

4

ジュズダマのなかまの種をつかって、世界のどの場所で、だれが、どんなものをつくっているのでしょう。

この疑問をとくために、つぎのふたつの方法で調べてみました。

❶ フィールドワーク

ものをつくっている人のところに出かけて行き、植物やものを観察しながら、お話を聞きます。聞いたことをメモしたり、写真をとったりします。

これまでにでかけたところ／インド、ミャンマー、ラオス、タイ、ベトナム、インドネシア、フィリピン、韓国、台湾、中国、日本

❷ コレクション

フィールドワークでものを観察したときには、持ち主に頼んで、なるべくゆずってもらいます。また、知り合いの人たちに手伝ってもらって、ものをできるだけ、あつめてみました。

あつまったものの数／650点（2010年9月現在）

どこからきたのか／アフリカ、中央アジア、南アジア、東南アジア、東アジア、オセアニア、南アメリカ

このように調べてみると、種を糸に通してつなぐ方法が、もっとも基本的なジュズダマの種のつかい方だとわかりました。

こどもたちがつくる

東南アジアの国々でジュズダマのことを聞くと、大人たちは「子どもが遊ぶものだよ」といいます。住む場所がちがっても、おなじ答えがかえってくることが多いのです。

また、ラオスやタイでは、ジュズダマの種を糸でつないでネックレスをつくり、首にかけて遊ぶ子どもたちに出会ったこともあります。

世界中でつくる

あつまったものをくらべてみると、種を糸でつないだものが世界のあちこちでつくられていることに気づきました。場所によって、通す糸の素材や、組み合わせる素材がちがっていますが、種を糸に通してつなぐという方法は共通です。

5

写真A-1

写真A-2／ミャンマー, シャン州／ワ

ものをつくる - 2

縫いとめる

東南アジアは、ジュズダマのなかまの種類が、世界でもっとも多く生えている場所です。この東南アジアでフィールドワークしてみると、ジュズダマのなかまの種が、いろいろなものをつくるのにつかわれていることがわかりました。

まず、東南アジア大陸部についてみてみましょう。

中国の南側、インドの東側にひとつづきの陸地があり、ミャンマー、ラオス、タイ、ベトナム、カンボジアといった国々が国境を接しています。ここが東南アジア大陸部です。東南アジア大陸部には、少数民族とよばれる人たちが暮らしています。少数民族にはたくさんのグループがあり、ことばや文化がそれぞれにちがっています。その文化の中で、特色のひとつとされるのが染織工芸です。少数民族の女性たちは、糸を紡いで、布を織り、色を染めて、独特の衣装をつくってきました。その衣服やバッグに、ジュズダマのなかまの種を縫いとめて、かざりにするのです。

ミャンマーの少数民族の例をみてみましょう。シャン州チェントンに暮らすワの女性（写真A）は、ショルダーバッグに、細長くて白い種を縫いとめていました。こうすると、布の上にきれいな模様がうかびあがります。シャン州タウンジーのタウンヨウの女性（写真B）も、細長くて白い種をつかいますが、彼女がかざるのは紺色のワンピースです。襟と袖と裾に、種がきちんとならべて縫いとめてありました。ミャンマー、ザガイン管区のナガの女性（写真C）は、赤と黒の大胆な配色のショールに、涙型で白い種を2、3個つなげて縫いとめていました。種が効果的なワンポイントになっています。

このように、ジュズダマのなかまの種を使って、衣服に縫いとめていることは同じですが、種のえらび方、かざり方にグループごとに特徴があるのはおもしろいことです。

さらに、種を糸でつないでアクセサリーをつくる人たちもいます。カヤー州から来たラターの女性（写真D）は、大きくて丸い種と小さくて丸い種をそれぞれつなげて、額と腰にかけていました。チン州のチンの女性（写真E）は、まつりのときにかぶる帽子に、涙型の種をつなげて、すだれのようにたらします。いっぽう、シャン州ラショウのパラウンの女性（写真F）は、黒いターバンと、細長くて白い種とプラスティックのビーズと組み合わせたかざりを頭に巻きつけていました。

写真B／ミャンマー, シャン州／タウンヨウ

写真C／ミャンマー, ザガイン管区／ナガ

左／写真D／
ミャンマー, カヤー州／ラター

写真E／ミャンマー, チン州／チン

写真F／
ミャンマー, シャン州／パラウン

写真G／タイ，チェンライ県／アカ

アカとカレン

ミャンマー北部、タイ北部、ラオス北部に住むアカの人びと（写真G）は、帽子、上着、エプロン、バッグ、ベルト、脚絆など、身につけるものの多くに、種を縫いとめます。しかも、その種の形や色、大きさの種が多様性にとんでいます。ただし、縫いとめるのは女性の衣服だけで、男性のものにはつかいません。

いっぽう、ミャンマー中央部やタイ北部のカレンの人びと（写真H、I）は、女性の上着にジュズダマのなかまの種を縫いとめます。とくに、結婚した女性の上着だけにつかうこと、細長い種だけをえらぶことに特徴があります。

アカやカレンの人たちは、ジュズダマのなかまを、毎年、イネやイモ類、野菜などと一緒に畑に植えて、育てています（写真J）。アカやカレンの人たちにとって、ジュズダマのなかまは農作物のひとつなのです。こうして収穫した種を黒色や藍色の布地の上に縫いとめると、つやつやと浮き上がってみえます。女性たちは、それぞれに工夫をこらし、ししゅうやパッチワークを種にくみあわせ、うつくしく衣服をかざるのです。

ベルト、ヘッドドレス、脚半、ジャケット、エプロン／すべてアカ

写真H／タイ，チェンライ県／カレン

写真I／ミャンマー，バゴー管区／カレン

細長い種とししゅうで、複雑な模様をつくりだす。

写真J／ミャンマー，バゴー管区／カレンの畑

写真K／インドネシア, 南スラウェシ州／ママサ

ものをつくる - 3

家をかざる

では、東南アジア島嶼部についてみてみましょう。

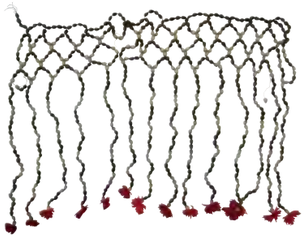
東南アジア大陸部の南側には、大小たくさんの島々がつらなっているところがあります。ここを東南アジア島嶼部といい、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ブルネイ、東ティモール、フィリピンの6つの国があります。ジュズダマのなかまは東南アジア島嶼部にも生えており、その種でいろいろなものがつくられていますが、ここでは、家のかざりについて取り上げることにします。

インドネシアのスラウェシ島に住む、トラジャやママサの人びとについてみてみましょう。トラジャやママサの人びとは、川の縁や畑のすみの空き地に生えるジュズダマから、種を集めてきます。そして、種を糸でつなげ、カーテンやのれんのようなものをつくり、窓や壁に掛けてかざります（写真K）。これは、訪ねてきた人へのおもてなしのひとつだそうです。

このカーテンやのれんは、かんたんなつくりのようにも見えますが、長いものや幅の広いものを完成させるには、根気強く、たくさんの種をつなげなければなりません。また、糸を編んだり、色の違う種をくみあわせたりして、模様をあらわすこともあります。

フィリピン、ミンダナオ島に住むティボリの人びとも、おなじように、ジュズダマの種でカーテンをつくっていました（写真L）。種とブロンズ細工をくみあわせた壁かざりもあります。こういったものは、観光客におみやげとして売られていました。

写真L／フィリピン, 南コタバト州／ティボリ



壁かざり／ママサ

壁かざり（3点）／ティボリ

ものをつくる - 4

祈る

ジュズダマの種が、宗教のためにつかわれることがあります。

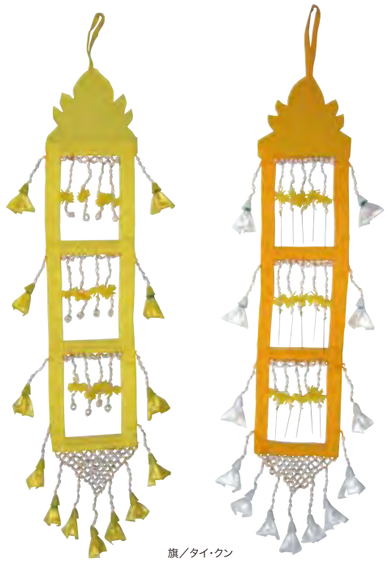
インドやミャンマー、ラオス、台湾、韓国では、ジュズダマのなかまの種で、仏教徒の数珠（念珠）がつくられています。たとえば、ラオス、ルアンナムター県の市場では、上座仏教を信仰するタイ・ルーの女性が、ほかの仏具といっしょに、ジュズダマの種の数珠を売っていました（写真M）。

また、上座仏教を信仰するミャンマー、シャン州のタイ系の人びとの間には、お寺に旗を奉納する習慣があります。むかしは、その旗をジュズダマの種でかざっていたそうです。シャンの男性たちは、「ジュズダマは洪水が起きても生き残るじょうぶな植物なので、健康で暮らせるようにとの願いを込めて、種をかざるようになった」、「ジュズダマは水のある冷たいところに生える植物なので、あらそいごとが起きず、平和が続く（＝冷たい状態が続く）ようにとの願いをこめて、種をかざるようになった」などと、その理由を説明しています。

ところが最近では、種のかわりにプラスティックのビーズがつかわれるようになりました。種をつかった旗はたいへん少なくなっています。そこで、シャン州チェントンで、タイ・マオの仏具屋さんにたのんで、ジュズダマの種をつかって昔の方法で旗をつくってもらいました（写真N）。

いっぽう、フィリピン、ミンダナオ島では、キリスト教徒のためにジュズダマの種でロザリオがつくられていました。南米のボリビアでも、おなじようにロザリオがつくられていたことが記録されています。

写真M／ラオス, ルアンナムター県／タイ・ルー



旗／タイ・クン

写真N／ミャンマー, シャン州チェントン／タイ・クン

薬にする

写真O

写真P

東南アジア大陸部のミャンマー、タイ、ラオスには、ジュズダマのなかまを薬としてつかっている人たちがいます。

つかい方は、根、茎、葉、種などの一部分を、あるいは植物全体をまるごと水で煮て、その煮汁を飲むというものです。また、他の植物と組み合わせるという人もいます。この薬は、結石、腎臓病、黄疸、糖尿病、胃痛、腰痛、発熱など、さまざまな症状に効くといわれています。

ラオスでは、薬用植物を専門にあつかう商人が市場に店を出していることがあり、そこでジュズダマの種や、種と葉を混ぜたものを買うことができます（写真O）。また、家の近くの空き地にジュズダマを植えておいて、誰かが病気になったら自由に使ってもらうのだという人もいました（写真P）。

写真R／ミャンマー、シャン州

写真S／ラオス、サヴァンナケート県

食べる・飲む

ジュズダマのなかまの穀類ハトムギは、東南アジアから東アジアにかけて、栽培されています。ミャンマー、タイ、ラオス、韓国、台湾などでは、畑の一角に、少しずつ植えてある様子を観察しました。このようにして、自分の家で食べる分を収穫しているのです。

収穫したハトムギは、粒のまま、飯、おこわ、粥などに調理して主食の一部に、あるいは煮たり、炒ったりして、スナックやデザートにしたりします（写真Q、R、S）。粉にひいてから、ちまきや餅、パンなどをつくることもあります。

ミャンマーやタイ、ラオスには、ハトムギの種が穂についたままの状態で収穫し、穂をまるごとゆでる方法があります。食べるときは、穂から種をひとつずつはずし、ピーナツのように、殻を割って中身をとりだして食べます（写真T、U）。

ハトムギでつくった飲み物には、お酒とお茶があります。ラオスやミャンマーでは、ハトムギのお酒が香りがよいといって好まれていました。韓国では、ハトムギの粉を原料に、お茶「ユルムチャ」をつくります。日本のハトムギ茶とちがって、白いココアのような飲み物です（写真V、W）。

写真Q／タイ、ピサヌローク県

写真T／ミャンマー、シャン州

写真U／ラオス、シェンクワン県

写真V／韓国、全羅南道

写真W／韓国、慶尚南道

バジェのつくり方

ハトムギのお菓子の例として、インドネシア、南スラウェシ州ママサ県の「バジェ」について、作り方を紹介します。これは、ママサの人たちの食べ方です。

1）ハトムギの実を棒でつついて、殻をわる。

2）ハトムギをざるに入れて、風であおぎ、殻と薄い皮の部分を飛ばす。

3）ハトムギがでんぷんの粒だけになったら、なべにとり、水を加えて煮込む。

4）ハトムギが柔らかくなったら、サトウヤシの砂糖とココナツミルクを入れてさらに煮込む。

5）全体をしっかりとかき混ぜて、できあがり。

ジュズダマとハトムギ
日本でのかかわり

帰化植物のジュズダマ

ジュズダマはもともと日本に生えていた植物ではありません。古い時代に渡来したのち、各地に広まったと考えられています。現在は、秋田県と関東以西で分布が確認されています（近田・清水・濱崎2006）。ただし、いつからジュズダマが日本に生えていたのか、確実なことはわかっていません。

ジュズダマがかなり古くから日本に生えていたことは、遺跡から発掘された植物遺物の分析によってあきらかになっています。例えば、群馬県子持村の黒井峯遺跡からは、6世紀前半に、榛名山の噴火による火砕流で埋まってしまった農村の跡が発掘されました。ここではジュズダマの種がみつかっています（石井・梅沢1994）。

また、鹿児島県指宿市の敷領遺跡では、畠跡と推定される場所からジュズダマ属の葉の一部がみつかりました。その年代は874年と推定されていますただし、この遺物がジュズダマなのか、ハトムギなのかについてはわかっていません。（古環境研究所2008）。

柳田国男とジュズダマ

民俗学者の柳田国男は、人とジュズダマのかかわりについて、おおきな関心を寄せていました。日本人の祖先は稲作の技術を携え、南方から「海上の道」を北上し、沖縄の島づたいに渡来した―日本人の日本列島への移住経路について、このような大胆な仮説を構想した著作『海上の道』には、「人とズズダマ」という1章がおさめられています。

柳田は、郷里のジュズダマ生育地のようすを次のように回想しています。「私の生まれ故郷は中部播磨、姫路から四里ほどの上流で、僅かな岡の南の緩傾斜面に、古く拓かれた農村であった。家の横手をお宮の方へ登っていく、上阪という細逕があって、それを隔てたすぐ西隣の田のへりに、この記念すべき植物が、毎年三四株自生したのである。（中略）とにかく四つか五つの年から数年の間、毎年この実が熟すると必ず採りに行き、草履を泥だらけにして叱られたことも覚えている。」

さらに柳田は、ジュズダマにまつわる、みずからの体験を紹介しています。幼少時、ジュズダマの実を糸に通し、二重三重にして首から腰のあたりにまで垂らして遊んでいたこと。顔や手足一面にイボができた9歳のとき、元漢方医の父親の勧めで『薏苡仁』で治療し、薏苡仁が「ジュズダマの皮をとったものだ」と教えられたこと。さらに、その4年後茨城県へ引っ越した時、近隣の鳩崎という町で鳩麦煎餅が販売され、人気を得ていたことです。

柳田も、ジュズダマやハトムギとかかわりをもつ人のひとりだったのです。

名前はどこからきたか

幼いころからジュズダマに慣れ親しんだ柳田国男は、その名前について、民俗学者としての考察をこころみました。その結果、「ジュズダマ」という名前は、仏教の数珠から来たのではなく、古名の「ズズダマ」「ツシダマ」に由来するものであり、ジュズダマの種と同様に、糸に通して首にかけていた宝貝の名称「ツシヤ」の起こりと関係があるのではないかと推測しています。その根拠のひとつとして、子どもの頃の体験を重視しました。ジュズダマは数珠のように手首にかけるものではなく、首から長く垂らすものであったこと、これは、東北のイタコの数珠やアイヌの首飾りに通じるような、仏教以前の、国風なものを子どもがまねていたのではないかと考えたのです。

ちなみに、内藤喬『鹿児島民俗植物記』（1991）には、鹿児島県内での呼び名として、「ジュズダマ」のほかに、「ズイダマ（鹿児島市）」「ズズダマ（串木野町）」「ジッダマノキ（阿久根市）」「シシダマ（大島）」を収録しています。

薬用と食用のハトムギ

ハトムギは、もともと東南アジア大陸部で起源したと考えられている穀類です。中国の馬援（Ma-Yuen）将軍が、紀元39年に現在のベトナム周辺を征服したとき、ハトムギの種を持ち帰り、これ以後中国で栽培が始まったとされています。学名のsubsp. *ma-yuen*は、この将軍の名前に由来しています（阪本1988）。

では、日本へはどのように伝えられたのでしょうか。奈良時代、中国の高僧鑑真和上が仏教の経典とともに漢方の処方と薬草種子をもたらしたさい、ハトムギもいっしょに献上されたという説、あるいは、加藤清正が朝鮮出兵の際に、朝鮮半島から種を持ち帰ったとする説などがあります（石田1981）。いっぽう、江戸時代の本草学者松岡玄達は、『用薬須知』（1726）に「薏苡仁、和名唐麦は皮がやわらかく、粒が大きい」など、ハトムギの特徴を明確に書き記しています（古川1963）。つまり、おそくとも江戸時代までには、日本でハトムギの栽培がはじまり、おもに薬用植物として利用されてきたと考えられます。

ハトムギは現在でも、中国や東南アジア方面から輸入され、生薬として使われています。また、最近では水田転作作物や健康食品として注目を集めており、国産のハトムギの出荷がさかんになっています。

ものをつくる - 5

つめる

日本では、ジュズダマの種を枕やお手玉ににつめて使います。これは、世界のほかの地域であつめられたものにほとんどみあたらない、めずらしいつかい方です。

薩摩川内市樋脇町／山下トキ子さん

1）布を中表にして横半分に折る。折った布のわになっていない方をそろえ、端から7mmのところを、木綿糸1本どりでぐし縫いし、縫いどまりを玉止めする。ミシンをかけてもよい。

2）縫い目にそって、布の端を片方にたおして折る。アイロンをかけてもよい。これで、布が筒の形になる。

3）筒のいっぽうの端から3mmのところを、木綿糸2本どりで、1周ぐるっとぐし縫いする。縫い終わったら、糸をしっかり引いて布をしぼり、玉止めしてとじる。これで布が袋になる。

4）袋を裏返して表面を出し、目打ちをつかって、底の部分、布をしぼったところをていねいにかえしておく。

5）袋のなかにジュズダマの種をつめる。

6）袋の口の端を底の部分と同じようにぐし縫いし、布の端を内側に折り込みながら、糸をしっかり引いて布をしぼり、玉止めしてとじる。玉止めした後、糸の端を針で袋の真ん中あたりにいったん出してから、切って完成。

山下トキ子さんのお手玉のつくり方

用意するもの（俵型お手玉1つ分）
ジュズダマの種（市販のプリン容器に軽く1杯分）、布（縦11mm x 横16mm）、木綿糸、縫い針、はさみ、目打ち

ポイント
1）種がこぼれないように、底と口をきちんととじましょう。
2）中につめる種の量は、自分で調節しましょう。つめすぎると遊びにくくなるので、注意してください。

おわりに

最近、地球環境問題に関連して、生物多様性がとりあげられることが多くなった。地球上の生き物について、その遺伝子や種、生態系、景観など、あらゆるレベルに危機的な状態がおきつつあること、またその現状を社会に訴えようとするとき、生物多様性ということばが用いられている。

ジュズダマについては、日本の植生の中での位置づけからすると、北陸以南ではどこにでも見られる普通の植物とされてきた。だが、実際にはそうではないのではないか、生育地が減少しているのではないかと考えるようになった。その理由のひとつは、展覧会での参加者とのやりとりにある。

ジュズダマをテーマに日本国内で展覧会を開催するのは、今回が3度目である。2005年に鹿児島で、2007年に大阪でそれぞれ開催した時、参加者のなかには、展示資料を見ながらジュズダマについての経験や思い出を語りはじめる人たちがいた。それを聞くのは大きなたのしみであり、思いがけない情報を得ることもあった。ところが、そのいっぽうで、ジュズダマを知らない、見たこともないという人も少なくなかった。

ジュズダマが生育する場所と、人が生活する場所は重なりあっている。そのような生活域の自然は急速に失われつつあり、どこにでも見られた普通の植物やただの虫が姿を消し、レッドリストに掲載されるようにもなった（鷲谷1999）。ジュズダマはいまのところ絶滅の危機に瀕しているわけではないが、生活域の自然の改変が進めば、ジュズダマも、ジュズダマにまつわる体験をもつ人も、まれな存在になってしまうかもしれない。

このような状況をふまえながら企画した本展覧会では、まず会場で、ジュズダマのなかまの種でつくったものを公開することにした。この展示によって、ジュズダマとともに暮らす人びとが世界のあちこちにいること、ジュズダマをめぐる生物多様性と文化多様性が深く結びついていることを紹介したい。

さらに会場の外では、ジュズダマの生育地や利用法を記録する活動にみなさまをいざなうことにした。これは、参加者ひとりひとりの展覧会での経験を、生活域の自然や植物とともにある暮らしへとつなげていくためのこころみである。

本展覧会の開催にあたって、ご協力いただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

2010年10月1日　落合雪野

展覧会について

第10回鹿児島大学総合研究博物館特別展、鹿児島県立博物館企画展
「植物のビーズ『ジュズダマ』と暮らす」

期間：2010年12月4日（土）-2011年1月16日（日）
時間：9:00-17:00
休館日：月曜日と年末年始12/31–1/2
場所：鹿児島県立博物館1階企画展示室（鹿児島市城山町1-1）

関連イベント

第10回自然体験ツアー「みる・とる・つくる―自然のジュエリー」

2010年11月27日（土）9：30-16：00
場所：薩摩川内市入来町清浦ダム
講師：寺田仁志（鹿児島県立博物館主任学芸主事）

第19回市民講座「植物とくすり」

2010年12月11日（土）13：30-15：00
場所：鹿児島県立博物館3階研修室
講師：本多義昭（姫路獨協大学薬学部長）

スタッフ

展示企画：寺田仁志・大屋哲（鹿児島県立博物館）
学術企画：落合雪野（鹿児島大学総合研究博物館）
アートディレクション：花田理絵子（アールエイチプラス代表取締役）
展示企画補助：酒匂晶子

特設ブログhttp://juzudama.blogspot.com/　（2010年7月～2011年3月）

引用文献

石井克己・梅沢重昭1994『黒井峯遺跡―日本のポンペイ』読売新聞社
石田喜久雄1981『ハトムギ―つくり方と利用法』農文協
落合雪野1996「タイ北部のジュズダマ属植物とその利用」『遺伝』50巻9号:50-54.
落合雪野2003「ハトムギ―焼畑と庭畑の穀類」吉田集而、堀田満、印東道子編『イモとヒト―人類の生存を支えた根栽農耕』平凡社247-265.
落合雪野2006「植物からものへ、ものから資料へ―ジュズダマ・コレクションの成立と公開」『研究彙集特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的複合領域の構築」自然資源の認知と加工研究班報告』17:4-12.
落合雪野2007「飾る植物―東南アジア大陸部山地における種子ビーズ利用の文化」松井健編『資源人類学　第6巻　自然の資源化』弘文堂123-159.
落合雪野2007「ミャンマー周縁部における種子ビーズ利用の文化―その継承と創出をめぐって―」『東南アジア研究』45(3):382-403.
落合雪野2007「種子を飾る人びと―植物利用からみたタイ文化圏」『自然と文化そしてことば』3:106-114.
落合雪野2009「ドメスティケーションの過程と結果をめぐる試論―東南アジア大陸部のジュズダマとハトムギを事例に―」山本紀夫編、国立民族学博物館研究報告84『ドメスティケーション―その民族生物学的研究』51-70.
古環境研究所2008「敷領遺跡楠田地点における植物珪酸体分析」お茶の水大学大学院人間文化創成科学研究科博物館学研究室・鹿児島大学法文学部比較考古学研究室『鹿児島県指宿市敷領遺跡（楠田地点）の調査』よしみ工産
近田文弘・清水建美・濱崎恭美編2006『帰化植物を楽しむ』トンボ出版
阪本寧男1988『雑穀のきた道』NHKブックス
内藤喬1991『鹿児島民俗植物記』青潮社
古川瑞昌1963『ハトムギの効用―ガンと美容と長寿にきく―』六月社
柳田国男1978『海上の道』岩波文庫
鷲谷いずみ1999『新・生態学への招待―生物保全の生態学』共立出版株式会社

展示資料収集

赤嶺淳、安渓貴子、石井正子、落合雪野、帯谷知可、片山一道、四方篝、田淵隆一、西本由利子、吉田集而、Nang Mo Kham、Kanok Rarkasem

本展覧会は、以下の研究の成果を公開したものである。

科学研究費補助金
「ウォーラセア海域における生活世界と境界管理の動態的研究」(13371007)
「ミャンマー北・東部跨境地域における生物資源利用とその変容」(13575024)
「有用植物の利用からみた東シナ海東部島嶼域の地域特性」(15710184)
「ミャンマー少数民族地域における生態資源利用と世帯戦略」(16402003)
「『大国』と少数民族―東南アジア大陸部山地における中国ヘゲモニー論を越えて」(20401009)
その他
日本バイオインダストリー協会研究助成 "Basic Research on the Diversity of the Traditional plants: Their Usage and Sustainability"
環境科学総合研究所研究助成金「日本海をめぐる民族植物学的研究」

本誌について

文：落合雪野
表紙、本文イラスト：波多野光
写真：落合雪野、花田理絵子
デザイン・制作：花田理絵子
発刊日：2010年10月1日